

抜
刷

第 21 集

音 声 の 研 究

【日本音声学会創立 60 周年記念論文集】

THE STUDY OF SOUNDS

Commemorative Volume for

the 60th Anniversary of the Phonetic Society of Japan

Vol. XXI

1985

THE PHONETIC SOCIETY OF JAPAN

蒙古語諸方言におけるウムラウト現象

栗 林 均

日本学術振興会奨励研究員

UMLAUT CHANGES IN MONGOLIAN LANGUAGES

Hitoshi KURIBAYASHI

Postdoctoral Fellow, Japan Society
for the Promotion of Science

SUMMARY: Many Mongolian languages in which a strong word-stress regularly falls upon the first syllable have undergone the change of umlaut or/and palatalization both of which were caused by the influence of the vowel *i of the non-initial syllable, which, in turn, has been reduced to a central vowel or disappeared like the other unstressed short vowels. The type and extent of umlaut and palatalization differ from one dialect to another. Kalmuck has been widely affected by the umlaut change, whereas Buriat and Dagur have introduced a series of palatal consonants instead. Khalkha and Chakhar have different types of umlaut accompanied, to some extent, by the palatalization of the following consonant.

1

蒙古語の母音 *i は、歴史的に多様な変化を蒙った母音として知られる。蒙古語史の、いわゆる「*i の折れ」は、語の第1音節の母音 *i が後続する音節の他の母音に同化して種々の母音としてあらわれる現象である。

例⁽¹⁾: *bira > b'ár 《体力》, *jida > džad 《槍》, *nidü(n) > nüd 《目》,
*širo > šor 《焼串》, etc.

「折れ」で知られるこのような母音 *i の変化は、現代の多くの蒙古語諸方言に認められるものである。

蒙古語の母音 *i はまた、他の音に影響を与え、変化を引き起こす原因となった母音として、蒙古語史のなかで重要な役割を果たした。つまり、第2音節以降に母音 *i をもつ語では、それに先行する母音や子音が *i に同化する変化が広範に生じているのである。そのような変化は、モンゴル人民共和国のハルハ・モンゴル語をはじめ、ソ連邦内のカルムイク語やブリヤート語、さらに中国内のダゲール語、内モン古諸方言（オールドス方言を除く——後述）等に広く観察されるが、変化の範囲と程度はそれぞれの言語や方言によって多様である。母音 *i に同化し、変質して得られる母音は一様でないし、口蓋化する子音の種類も方言ごとに異なっている。

たとえば、13～14世紀の時代に属する中世蒙古語の *ami(n)* 《生命》 という語は、上述の現代諸方言で次のような対応形を有している：⁽²⁾

ハルハ・モンゴル語	ám'ĩ ~ ám'
カルムイク語	äm̄n ~ äm̄'n
ブリヤート語	am'ä
ダゲール語	am'
内モン古語	am' ~ æm' ~ æm

これは、第2音節（以降）の母音 *i が先行する音に影響を及ぼした逆行同化の現象にはかならない。別言すれば、母音 *i の口蓋音的特徴が、それに先行する他の母音や子音に先取りされた現象である。われわれは、母音 *i の口蓋音的特徴が先行する母音に移行してそれが変質する場合を「ウムラウト変化」と呼び、口蓋音的特徴が先行する子音に移行する変化を「口蓋化」と呼ぶことにする。

ちなみに、「折れ」もウムラウト・口蓋化変化も、母音 *i に関連した音変化であると同時に、いずれも逆行同化の変化であることは興味深い。「折れ」は、母音 *i が第1音節に位置し、それ自体が変化する場合であり、ウムラウト・口蓋化変化は、母音 *i が第2音節以降に属して他の音を変化させるものであるが、いずれも先行する音が後続する音の影響のもとに、それに近い音に変質する点は両方に共通している。

この小論では、蒙古語諸言語におけるウムラウト・口蓋化変化の様々なタイプを概観しようとするものであるが、ウムラウト変化に関しては、変化を受ける母音にあらかじめ短母音、長母音、二重母音の区別をしておく必要がある。これによって母音 *i による逆行同化の現象は、次のような場合に分けて検討することができる：

1. 母音の変質（ウムラウト）
 - (1) 第1音節の短母音の変質
 - (2) 長母音の変質
 - (3) 二重母音 (*ai, *ei, *oi 等) の変質

2. 子音の口蓋化

なお、長母音と二重母音の変質は、第1音節に属するものに限らないが、ここではそれらが第1音節に位置する場合の変化を中心にとりあげ、異なった位置におけるそれらの発展の詳細には立ち入らない。

2

母音 *i の影響によるウムラウト・口蓋化変化は、おそらく、蒙古語諸方言の「強勢」の位置と強度、およびそれに起因する「弱化母音」の発達と密接な関係がある。

まず、強勢の位置との関係では、ウムラウト・口蓋化変化の生じた蒙古語諸方言は、いずれも語の第1音節に強勢を有していることが指摘できる。語の第1音節に規則的な強勢をもたない蒙古語系の言語としては、中国甘肅省や青海省のモンゴール語、バオアン語、ドゥンシャン語、シラ・ユグール語、およびアフガニスタンのモゴール語等があるが、これらの諸言語にウムラウトや口蓋化の変化は見られないのである。中世蒙古語の *ami(n)* 《生命》および *mori(n)* 《馬》に対する、上述の諸言語の対応形を例にそれを確かめると：

ドゥンシャン語 ⁽³⁾	amin	mori
シラ・ユグール語 ⁽⁴⁾	amən	moorə
モンゴール語 ⁽⁵⁾	amun	morə

バオアン語⁽⁶⁾

amug

mora

モゴール語⁽⁷⁾

—

morin

のようになっている。

次に、強勢の強さおよび「弱化母音」の発達とウムラウト・口蓋化の変化との関係をみると、それらはさらに緊密に関係しているように見える。「弱化母音」というのは、ここでは、語の第1音節に規則的な強勢をもつ現代蒙古語諸方言の多くで発達した、第2音節以降の中性化した短母音のことである。これらの諸方言では、強勢を持たない第2音節以降の短母音は著しく弱化して、質的に独立性を失い、第1音節の母音に完全に依存した母音となっている。ハルハ・モンゴル語や内蒙古語（チャハル方言等）では、さらに、弱化母音は閉音節でのみ安定して保持され、それ以外では消失するというように、その生起も、子音の配列と音節の構造に完全に依存した存在となるに至っている。

弱化母音の発達した蒙古語諸方言では、第2音節以降の母音 *i も弱化の例外ではない。しかし、他の母音と違って、母音 *i は弱化し、消失する場合にも、その口蓋音的特徴は先行する母音や子音に移行され、保存される傾向が著しい。第2音節以降の母音 *i が弱化し、独自の特徴を失う現象と、その口蓋音的特徴が先行する母音や子音に先取りされる現象とは相互に作用しているように見える。

これに関連して、中国内蒙古自治区のオルドス方言の特異な位置づけを指摘しておく必要がある。オルドス方言は、他の内蒙古諸方言やハルハ・モンゴル語と同様、語の第1音節に規則的な強勢を有するが、その強さは他の言語ほど強くない⁽⁸⁾。そして、第2音節以降の短母音の音質が第1音節の母音に完全に依存したものでなく、独立した性質を保持しているという点で、他の内蒙古諸方言のみならず他の現代蒙古語諸言語とも著しく様相を異にしている。たとえば、オルドス方言の ama 《口》, amɣ 《粟》, ami 《生命》 および am 《平安に》 という語は、互いに第2音節の短母音の違い (a/ɣ/i/ゼロ) だけで意味が区別されている。要するに、オルドス方言では「弱化母音」は形成されるに至っていないのである。

興味深いのは、オルドス方言ではウムラウトや口蓋化の変化も、後述の限られた場合を除いて、ほとんど生じていないことである。次の例は中世蒙古語の

ami(n) 《生命》と mori(n) 《馬》に対する内蒙古諸方言の対応である (B. X. Тодаева⁽⁹⁾ による):

ホルチン, ジャライト, ドルブト, ゴルロス,	} 《生命》	《馬》
アルホルチン, パーリン, オンニュト, ナイマ ン, ハラチン, トゥメト		
シリングル, ウランチャブ, チャハル	} am'	mor'
オールドス		
	ami	mori

内蒙古方言のなかで、オールドス方言だけが、第2音節 (以降) の母音 *i の弱化和ウムラウト・口蓋化の変化から独立していることが明らかである。

オールドス方言に観察される「限られた場合」のウムラウト変化としては、次のような二重母音の変質がある⁽¹⁰⁾。(かっこ内はダゲール語の対応形⁽¹¹⁾)

1) *ai > ā (~ äë): āl (ail) 《村》, s̄an (sain) 《良い》, nām (naim) 《八》.

2) *oi > oö: oöro (oiroon) 《近くに》, noör (noir) 《眠り》, noöton (noiton) 《湿った》.

3) *ei > ī: kī (xein) 《風》, īm (eimer) 《この様な》, gī- (gei-) 《明らむ》.

*ui は二重母音 uī として, *üi も通例二重母音 uī としてあらわれるが、後者は子音 dž のあとでは üj ~ ǖ となる: *jüil > džüj ~ džǖ 《種類》, *jüi > džüj ~ džǖ 《道理》 etc.

また, ǖ は子音 k, g のあとにもあらわれるが、これは *öi に由来する可能性がある。⁽¹²⁾

例: kuṽs ~ kūs ~ kīs ~ kōs 《臍》, kuṽten ~ kütön ~ kīten 《寒い》,
gēn ~ gūn ~ gīn ~ gōn 《浅い》

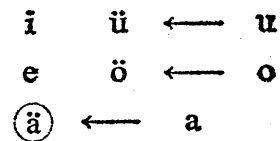
3

蒙古語のウムラウト変化は、一般にこの言語の母音調和でいうところの「男性母音」の類に関係している。つまり短母音では後寄りの *a, *o, *u; 長母音もこれと同類の *ā, *ō, *ū がそれである。また二重母音では男性母音を含む

*ai, *oi とならんで *ei の変化がしばしば見られるところであるが、稀に *ui および *üi (あるいは *öi) のウムラウトと見なしうる変化もある⁽¹³⁾。

カルムイク語は、蒙古語諸方言のうちでもウムラウト変化が最も顕著に生じた方言の一である。そこでは上に述べたすべての母音の変質を観察することができる。ここでは蒙古語のウムラウト・口蓋化変化のひとつのタイプを代表するものとしてカルムイク語における変化を検討する⁽¹⁴⁾。ちなみに、この方言は他の蒙古語諸方言と比較して、第2音節以降の母音が質的に著しく弱化していることでも知られている。

カルムイク語では、ウムラウト変化を蒙った短母音 *a, *o, *u は、それぞれ ä, ö, ü としてあらわれる。注意を要するのは、ä はそれまで体系内に存在しなかった新しい母音であるのに対して、ö と ü は既に体系内に存在している母音だという点である。この関係は右のような図で表すことができる。(丸印は新しく体系内に生じた母音。)



例 (かっこ内は蒙古文語形): tāwən (tabin) 《50》, bärxə (bariqu) 《摺む》, mörən (morin) 《馬》, xörən (qorin) 《20》, ürəxə (uriqu) 《招く》, xüwə (qubi) 《部分》, ärkə (araki ~ ariki) 《乳酒》 etc.

これと同様な関係は、長母音の変質においても認められる: ウムラウト変化の結果、*ā は新しい母音 ā を形成し、*ō と *ū は既存の長母音 ö と ü に融合しているのである。

例: dārə (dayari) 《鞍傷》, zörə (joyuri) 《財産》, sürə (sayuri) 《土台》, dūrən (dayuriyan) 《響き》 etc.

ところで、このようなウムラウト変化は、母音 *i に先行するある種の子音によって妨げられ、実現されていない場合がある。それは、第1に、母音 *i に先行して子音 *j, *č, *š (~ *s) がある場合である。

例: adžəl (ajil) 《仕事》, atšə (ači) 《功績》, tašxə (tasiq) 《打つ》, otšən (očin) 《火花》, xodžyər (qojiyar) 《禿げた》, tojšəxə (tongsiqu) 《たたく、つつく》, xutšəxə (qučiqu) 《覆う》, xudžər (qujir) 《塩沢》 etc.

次に母音 *i に子音 *l, *n, *t, *d; *g, *k が先行しているとき、これらの子音は l', n', t', d'; g, k としてあらわれ、やはり母音のウムラウト化は妨げられている。上の一連の子音は男性語でその他の位置にあらわれる l, n, t, d; γ, x に対立する系列をなしており、これらは口蓋化変化とみなすことができる。

例: al'mən (alima) 《リンゴ》, xan' (qani) 《伴侶》, āgəm (ayagim) 《蒸し暑い》, tol' (tolin) 《鏡》, zokəxə (jokiqu) 《適する》, un'n (unin) 《梁》, bod' (bodi) 《菩提》, tot' (toti) 《おうむ》, šāgxə (šagiqu) 《ざわめく》, tūl' (tuuli) 《昔話》, ōl' (oyuli) 《手斧》 etc.

ただし、母音 *a は *d に先行してウムラウト化している。

例: ädəs (adis) 《祝福》, γärdə (yarudi) 《驚》, ädəl (adali) 《同じ》。

二重母音 *ai, *oi, *ei はカルムイク語では、それぞれ長母音 ā, ō, ī としてあらわれる。

例: āl (ayil) 《村》, nāmən (naiman) 《八》, ōr (oyira) 《近い》, nōtən (noyitan) 《湿った》, im (eyimü) 《このような》, dīlaxə (deyilkü) 《勝つ》 etc.

二重母音 *ui, *üi は通例長母音化して ū, ü としてあらわれる。*ui が次のように ū となる例は稀である: xū (qui) 《旋風》。さらに、蒙古文語の üi に対して長母音 ī をもつ語があるが、オルドス方言のところで述べたように、これは *öi に由来する可能性が高い。

例: kīsən (küisün) 《臍》, kītən (küiten) 《寒い》,
cf. būl (büile) 《菌茎》, tūmər (tüimer) 《火事》 etc.

4

ウムラウト現象が際立っているカルムイク語とは対照的に、ブリヤート語とダゲール語では子音の口蓋化が著しく発達した。そこでは、第2音節以降の母音 *i の弱化あるいは消失とともに、先行する子音が口蓋化され、これによっ

て一連の口蓋化子音が形成されるに至った。その反面、これらの言語では、ウムラウト変化は極めて軽度に認められるに過ぎない。プリアート語の主要なウムラウト変化としては二重母音 *ei が \bar{i} としてあらわれていることである。ダグール語にはこの変化も生じていない。

例⁽¹⁵⁾(カッコ内はダグール語の対応形⁽¹⁶⁾): xī (xein) 《空気》, imě (eimer) 《このような》, gī- (gei-) 《明らむ》, etc.

一方、ハルハ・モンゴル語(ハルハ方言)と内蒙古語(チャハル方言)では、ウムラウトと口蓋化が入り混った現象が認められる。ここでは、母音 *i に先行する位置で、「母音のウムラウト化」と「子音の口蓋化」が同時に実現されている。それらのいずれを本質的な変化とみなし、いずれを付随的な現象とするかに関しては、標準語としての正書法とその基礎にある口語との相違や、下位方言相互間の差異の存在が問題を複雑にしており、諸家の意見も必ずしも一致しない。

ハルハ・モンゴル語は、書きことばとしては、軟音符 (ь) を用いて口蓋化子音を表記するのみで、ウムラウト化は正書法に反映されていない。しかし、口語としては、上述のように、子音の口蓋化と同時に、先行する母音も変質しており、むしろこれを本質的な変化とみなす立場もある⁽¹⁷⁾。それによれば、短母音 *a, *o, *u はハルハ方言でウムラウト変化の結果それぞれ \bar{a} (= æ), \bar{o} (= œ), \bar{u} (= y) という独立した母音を形成した。子音の口蓋化はそれに付随する副次的なあらわれとみなすことになる。この関係は右のように図示することができよう。

i	ü	⓪	←	u
e	ö	Ⓛ	←	o
		ⓐ	←	a

例(カッコ内は現代正書法の形): taw' (тавь) 《50》, xār' (харь) 《外国の》, xón' (хонь) 《羊》, tót (тодь) 《おうむ》, ūr'ig ~ ūr'äg (урин) 《暖かい》, etc.

ハルハ方言で、長母音 *ā, *ō, *ū がウムラウト化して āe, ōe, ūi と二重母音化していることは注目に価する⁽¹⁸⁾。

例: sāel (сааль) 《乳量》, dzōer (зоорь) 《貯蔵庫》, sūir (суурь) 《土台》, etc.

しかも、それらは元来の二重母音 *ai, *oi, *ui が変質して得られる母音に等しい。したがって、次のようなペアは、同音異綴語となっている:

[áel]	{ айл 《村》 ааль 《性格》	[óel]	{ ойл 《理解しろ》 ооль 《手斧》
[úil]	{ уйл 《泣け》 ууль 《ふくろう》	[dáex]	{ дайх 《託送する》 даахь 《からまった(毛)》

この関係は右のようにあらわすことができる。

*ai → áe ← *ā

*oi → óe ← *ō

*ui → úi ← *ū

内蒙古語(チャハル方言)では、短母音 *a, *o の変質は顕著に認められるが、*u のウムラウト化は未発達である。ここでは、母音 *i に先行する *a と *o は、それぞれ á (= æ ~ ε), ó (= œ) としてあらわれているが、*u は変質の度合いが少なく、これに代って *u と *i の間の子音には際立った口蓋化が認められる。

例⁽¹⁹⁾(かっこ内は蒙古文語形): ám (amin) 《生命》, xán (qani) 《伴侶》, tol (tolin) 《鏡》, gob (γobi) 《ゴビ》; un' (unin) 《垂木》, ur'- (uri-) 《招く》 etc.

上のウムラウト化は、母音 *i に、子音 *j̣, *č̣, *ṣ̌ (~ *s) が先行している場合には、妨げられ実現されていない⁽²⁰⁾

例: dadžij̣ (dajin) 《内乱》, atšā (ačiya) 《荷駄》, baxṣ̌ (baysi) 《師》, otṣ̌- (oč̣i-) 《行く》, doxṣ̌əŋ̣ (doysin) 《凶暴な》 etc.

チャハル方言では、二重母音 *ai と *oi が長母音 ā (= æ: ~ ε:), ō (= œ:) としてあらわれている。

例: āl (ayil) 《村》, sāŋ (sayin) 《良い》, ōr (oyira) 《近い》, nōr (noyir) 《睡眠》 etc.

母音 *i に先行する長母音 (*ā, *ō, *ū) のあらわれは一様でない。*ā はウムラウト化を蒙り、上述の二重母音と同じあらわれがみられる。*ū は口蓋化

子音の前で変音していない場合が多い。

例: $\bar{d}\bar{a}r$ (dayari) 《鞍傷》, $\bar{d}\bar{a}x$ (dayaki) 《からまった(毛)》, $\bar{b}\bar{a}ran$ ($\bar{b}\bar{a}y\bar{a}$ -
rin) 《部族名》; $\bar{u}l'$ (uyuli~uuli) 《ふくろう》, $\bar{t}\bar{u}l'$ (tuuli) 《史詩》,
 $\bar{u}x'l\bar{a}x$ (uukilaqu) 《あえぐ》 etc.

これと並んで注目すべきは、長母音 * \bar{a} , * \bar{o} , * \bar{u} がウムラウト変化を蒙らず、しかも子音の口蓋化も生じていない若干の語が存在していることである。

例: $\bar{a}l$ (ayali) 《性格》, $\bar{s}\bar{a}l$ (sayali) 《乳製品》, $\bar{x}\bar{u}l$ (qauli) 《法律》 $\bar{s}\bar{u}r$
(sayuri) 《土台》, $\bar{o}l$ (oyuli) 《手斧》, $\bar{b}\bar{o}m$ (boyumi) 《投縄》, $\bar{d}\bar{z}\bar{o}r$
(joyuri) 《地下蔵》, etc.

このようなあらわれが、条件的変化によるものか、方言間の干渉によるものか、あるいは他の原因によるものか、速断はできないが、第2音節以降の母音 * i の口蓋音的特徴が完全に失われる変化が存在することに注意を払っておきたい。

*

弱化母音の発達のひとつをなす第2音節以降の母音 * i の弱化と、それに伴うウムラウト・口蓋化の発達は、蒙古語系の一群の諸言語・諸方言における変化のひとつの「潮流」とでも呼ぶことができる。その流れは、決して均質的で単一の流れではない。それは、変化の方向性は等しくしながらも、言語・方言ごとに程度と範囲を異にする個々独立の変化の集まりである。

ここでは、蒙古語系の主要な言語におけるウムラウト変化の諸タイプを概観したが、取り扱った言語は、それぞれ内部の方言的多様性を超越したものと与えられている。個々の方言や下位方言において、どのタイプの変化がどの範囲に生じているかその詳細を明らかにすることは今後の重要な課題である。そして、それは諸方言の区画や分類、相互の干渉の問題の解明に有用な指標を提供するものとする。



栗林 均

註

- (1) ハルハ方言の例。
- (2) a, ä は前寄りの a ([æ] ~ [ɛ]); m' は口蓋化子音 [m] をあらわす。以下、口蓋化子音は同様に表記する。
- (3) 劉照雄『東郷語簡志』北京, 1981.
- (4) 照那斯圖『東部裕固語簡志』北京, 1981.
- (5) 照那斯圖『土族語簡志』北京, 1981.
- (6) 布和, 劉照雄『保安語簡志』北京, 1982.
- (7) M. Weiers, *Die Sprache der Moghol der Provinz Herat in Afghanistan*, Opladen, 1972.
- (8) A. Mostaert "Le Dialecte des Mongols Urdus (Sud)" *Anthropos* XXI, 1926, p. 853.
- (9) 《Язык монголов внутренней Монголии, Материалы и словарь》Москва, 1981.
- (10) A. Mostaert, *Dictionnaire Ordos*, seconde éd., New York · London, 1968 (rpt.).
- (11) 恩和巴圖『達漢小詞典』呼和浩特, 1983.
- (12) 『華夷譯語』にみられる köyisün 《曠》 köyiten 《寒》, g'ö'en 《淺》も参照。
Cf. A. Mostaert, *Le materiel mongol du Houa I I lu 華夷譯語 de Houng-ou (1389)*, Bruxelles, 1977.
- (13) 星印(*)をつけた音形は、ここでは、現代語の音形が直接由来する、一段階前の推定形をあらわす。
- (14) 以下、カルムイク語の例は《Калмыцко-русский словарь. Под редакцией Б. Д. Муниева》Москва, 1977. にもとづく。
- (15) К. М. Черемисов 《бурятскоу-русский словарь》Москва, 1973.
- (16) 註(11)を参照。
- (17) Ж. Төмөрцэрэн "Халхын аялгууны эгшиг авианы тагнайшрал" 《Хэл зохиол судлал》, Tomus VII. Fasc. 4. 1970, pp. 143 — 150.
- (18) Э. Вандуйは、これをハルハ東部下位方言の特徴に帰している。
Cf. 《Халхын аялгуу》Улаанбаатар, 1970, p. 81.
- (19) おもに、布林特古斯編『蒙語正音正字詞典』1977. にもとづく。
- (20) この場合にも、語頭に *j, *č, *š がある場合にはウムラウト化が生じている。例: džábdž (jabji) 《口角》, džártsim (járčim) 《原則》, džótsin (jočin) 《客》etc. これは、孫竹「蒙古語察哈爾方音与書面語音的比較」『民族語文』1983—2, p. 8f. による。